

SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS No. 154 September 2018

研究の最前線

◆ 2018年度夏期国際シンポジウム ◆ 《移りゆく北極域と先住民社会：土地・水・氷》開催される

スラブ・ユーラシア研究センターでは、7月5日と6日の二日にわたり、夏期国際シンポジウム「移りゆく北極域と先住民社会：土地・水・氷」On Land, Water and Ice: Indigenous Societies and the Changing Arcticが開かれました。

近年北極地域では、地球温暖化による環境の変化が著しく、また資源開発にと

もなう環境と社会の変化が急速に進んでいます。とくに、自然環境と関わりの深い生業を営む先住民にとって、こうした事態はより深刻です。スラブ・ユーラシア研究センターと北極域研究推進プロジェクト（ArCS）の合同主催で開かれた本シンポジウムでは、北極域の先住民が今日直面している様々な変化を主題として、初日に基調講演がおこなわれ、続いてテーマごとに5つのセッションで報告がおこなわれました。

各セッションのテーマとしては、1. シベリア先住民の暮らしとネットワーク、2. 現代グリーンランド社会の現状と将来、3. アラスカ先住民の生活様式、といった地域ごとに区分される3つのセッションの他に、4. 北極のガバナンスと知識、5. 極域沿岸の歴史、といったより広義のテーマを掲げる2つのセッションが続きました。各セッションで3本ずつ報告があり、基調講演と合わせると、全体で17本の報告がおこなわれたこととなります。そのうち3本は、それぞれシベリア、グリーンランド、アラスカの先住民を代表する研究者ないし活動家による報告でした。分野別では、文化人類学的なアプローチをとるものももっとも多く、ついで歴史学、地理学、考古学、政策研究があげられます。シンポジウム翌日の7月7日には、海外からの参加者を中心として、平取町二風谷のアイヌ文化施設で巡検がおこなわれました。

本シンポジウムでは、個々の報告がセッションの垣根を越えて、他の報告グループと密接な



シンポジウム会場のようす



平取町二風谷にて、巡検の一場面

影響を及ぼすかという問題についても、複数のセッションで議論されました。その他にも、周囲の気候や環境の特徴を生かした狩猟文化のあり方や、国家による地方統治と先住民の生存をめぐる問題といったテーマも、セッションをまたいで参加者に共通の関心を引き起こしました。

こうした議論の中で浮かびあがってきたのは、単に気候変動の影響だけでなく、国家の枠組みや世界経済の動向、欧米基準の拡大といった、様々な要因による力を受けて翻弄される、極北の先住民たちの姿です。しかしその一方で、伝統的な言語文化の保存プロジェクトを始動する先住民自身の試みや、日常生活において既存の資源を巧みに利用する戦略的指向を紹介する報告では、変化の時代を生き抜く先住民のしたたかさが示されました。

二日間で90名にのぼる本シンポジウムの参加者は、各セッションの議論が組織者の意図をはるかに超えて、互いに有機的なつながりを伸ばしながら、深化していく場面に遭遇することになりました。〔後藤〕

◆ ボーダースタディーズ・サマースクール開催される ◆

グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」以来の蓄積を誇る UBRJ のサマースクールが、2018 年度も北大サマーインスティテュートの枠組みで開催されました。本スクールは公共政策大学院とスラブ・ユーラシア研究センターが共同で実施しており、UBRJ のメンバーが中心となって学生の募集や講義などをおこなっています。

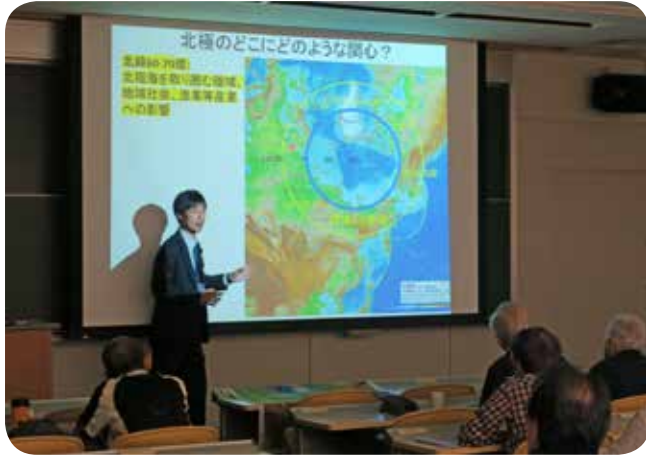
池直美、ディヴィッド・ウルフ、岩下明裕、ブル・ジョナサン（以上、UBRJ）が講義しました。世界各国から延べ（公共政策大学院とセンターの双方で）30 名を越える学生や若手研究者の参加があり、熱心な議論が続きました。サマースクールにかかわった皆さま全員に心よりお礼申し上げます。〔ブル〕



講義の一場面

◆ 公開講座「ロシアと北極のフロンティア：開発の可能性と課題」開かれる ◆

今日、北極域で起きていることと、地球の温暖化現象との間に見いだされる関連性について、科学者の間で強い危機感が持たれる一方で、一般においては懐疑的な見方が広がっていることは、否定できません。「地球温暖化はウソ」という主張が、科学的な論証を覆すものではないとしても、科学者は温暖化の側面ばかりを強調しすぎではないかという意見が根強くあるのは事実です。現に、世界の超大国でも、「不都合な真実」が隠



講座の一コマ

されているというかつての指摘が、温暖化を論じる者に都合のよい真実ばかり表に出されているという指摘によって、反撃を受けています。このような中で、北極域の研究に携わる者が一般市民に対して果たすべき使命の一つは、この地域の今をできるだけ多方面から解説する努力を重ねることでしょう。

一方、ロシアが北極海に面してもっとも長い海岸線を持つ国であり、北極域の政治、経済、国際関係のいずれの分野においても重要なアクターであることは、言うまでもありません。その広大な領土には、北極の国際的な共同研究の拠点となる観測基地があり、研究者レベルでの協力が欠かせないものとなっています。このような中で、ロシアの北極域について、まず広く一般の認識を深めることが求められています。

今年5月に北海道大学を会場として、一般市民を対象に、7回にわたっておこなわれた公開講座『ロシアと北極のフロンティア：開発の可能性と課題』は、以上のような要請に裏付けられる形で開かれました。この時期に連続しておこなわれる公開講座は、スラブ・ユーラシア研究センターが日頃の研究成果を一般市民に還元することを目的として、1986年から毎年おこなってきた恒例行事で、今年で33回目になります。全7回の各講義内容は、ロシア北極圏の経済開発、ロシア北極圏の自然、北極海航路、シベリア先住民の言語、先住民主体の政治外交、先住民の生業、シベリア牧畜民の経営形態に、それぞれ焦点を当てるものでした。

全部で74名の登録があり、ほとんどの方が毎回の講義に参加されました。プログラムを通じて、今日北極域で見られる現象が、受講生の方々により身近に感じられ、私たちの身の回りで起きていることと深い関わりを持っているということ、少しでも感じていただけたことを願います。[後藤]

◆ センター一般公開開催される ◆

今年の当センター一般公開は「知って楽しいスラブ・ユーラシア地域！」と題しておこなわれ、晴天に恵まれて北大祭全体に人が大勢集まったこともあり、過去最高の469名の来場がありました。

一般公開では、センタースタッフによる最新の研究成果に関する展示とサイエンス・トークをおこない、毎年恒例となっている、大人から子どもまで楽しめるスラブ・ユーラシア地域の絵本の展示、アニメ上映をおこないました。また、本年度はロシアとウクライナ、ウズ



各地の民族衣装の展示

ベキスタン、そしてロシアの少数民族ニブフの民族衣装を立体的に展示しました。その他に、スラブ・ユーラシア各地の珍しい工芸品を展示し、来場者はエキゾチックな刺繍や魚の皮で作ったベルトなどに触れて楽しんでいました。センターの技術スタッフの笹谷氏のご尽力により、スラブ・ユーラシアの観光地を背景にした顔出しパネルも設置し、来場者が流行の「SNS 映え」

を狙って(?) バスト・ショットに挑戦する姿が見られました。

サイエンス・トークは、高橋沙奈美助教による「ロシア皇帝一家殺害事件：革命と贖罪の100周年」と、油本真理助教による「ロシア大統領選挙：プーチン政権のこれまでとこれから」というロシアの過去と現在を扱う興味深い構成の2本立てでした。ロマノフ朝最後の皇帝一家が殺害され長い間秘密にされてきた経緯や、殺害現場の現在の様子、ロシアや国際社会が事件をどう受け止めてきたか等を言葉巧みに語る高橋助教に、大勢の来場者が熱心に耳を傾けました。油本助教は今年3月におこなわれたばかりのロシアの大統領選挙について、当日現地で撮影した写真など最新の情報をまじえてわかりやすく説明し、来場者を引き込んでいました。サイエンス・トークが終わった後も、質問に並ぶ人々がいました。



サイエンス・トーク会場

本行事は5研究所・センター合同一般公開の枠組の中でおこなわれましたが、5研究所でおこなうシールラリーが毎年好評で、このために場所の分りにくい当センターまで子どもたちが頑張って来てくれます。幹事役を務めた電子科学研究所をはじめ、共催した他の研究所、多大なご協力をいただいたスタッフの皆様に深く感謝申し上げます。[菊田]

◆ 2018 年度中村・鈴木奨励研究員決まる ◆

2018 年度中村・鈴木基金奨励研究員は以下の 4 名の方に決定しました(五十音順)。[編集部]

採用決定者・所属	テーマ	予定滞在期間	ホスト教員
<small>くろやなぎ</small> 畔柳 千明 東京大学大学院	北京宣教団とゴロフキン使節派遣後のロシアの対清政策	2018 年 7 月 13 日 ～ 8 月 3 日	ウルフ
澤 直哉 早稲田大学大学院	オーシブ・マンデリシタームの 1930 年代前半の創作における生物学・地質学からの影響	2018 年 9 月 3 日 ～ 9 月 16 日	安達
須川 忠輝 大阪大学大学院	1990 年代半チェコ、スロバキアにおける中央地方関係の動態	2018 年 10 月 17 日 ～ 10 月 31 日	仙石
東 和穂 東京大学大学院	ロシア象徴主義に表れた他者の表象、「東方」のイメージ	2018 年 7 月 1 日 ～ 7 月 21 日	安達

◆ 2018 年度科学研究費プロジェクト ◆

2018 年度のセンター教員・研究員が代表を務める文部省科研費補助金による研究プロジェクトは次の通りです(8月3日現在:「研究成果公開促進費(学術図書)」を除く)。[事務係]

基盤研究 (A)

- 宇山 智彦 権威主義とポピュリズムの台頭に関する比較研究 (2018-21 年度)
- 田畑伸一郎 ユーラシア地域大国(ロシア、中国、インド)の発展モデルの比較 (2015-18 年度)
- 野町 素己 新コーパスに基づくカシュブ語文法の高階層的研究 (2017-21 年度)

基盤研究 (B)

- 長縄 宣博 暴力による民主主義の 20 世紀:トランスナショナルヒストリーの試み (2018-22 年度)
- ウルフ・ディビッド 中露関係の新展開:「友好」レジーム形成の総合的研究 (2015-18 年度)
- 仙石 学 ポストネオリベラル期における新興民主主義国の経済政策 (2016-19 年度)
- 永山ゆかり シベリア少数言語の統語構造に関する類型論的研究:従属節の構造と節連結を中心に (2017-19 年度)

挑戦的萌芽研究

- 越野 剛 北東ユーラシアにおけるロシアと中国の文化混在の記憶と表象 (2016-18 年度)
- 野町 素己 セルビアにおけるバナト・ブルガリア語の現状および言語変化に関する研究 (2016-18 年度)

挑戦的研究

- 高本 康子 旧日本陸軍遺品資料における「大陸」諸宗教表象の研究 (2017-19 年度)

国際共同研究加速基金

- 高橋沙奈美 ロシア教会における君主主義の系譜:在外ロシア教会からツアレボーージュニキまで (2018-19 年度)

若手研究

- 斎藤 慶子 帝政期・革命期ロシアのジャポニスム・バレエ 歴史・美学・政治 (2018-21 年度)
- ブル・ジョナサン The role of private charities in repatriation from the Japanese Empire (2018-20 年度)

若手研究 (B)

- 高橋沙奈美 国際関係をとおしてみる現代ロシア教会の列聖と聖人崇敬 (2016-18 年度)
- 油本 真理 現代ロシアにおける政治体制と選挙:選挙の公正性をめぐるポリティクス (2016-18 年度)

加藤美保子 クリミア編入以後のロシアのアジア外交：中国中心主義から多角化への移行とその問題（2017-20年度）

安達 大輔 19世紀ロシア文学における言語と身振りの関係についての総合的研究（2015-18年度）

特別研究員奨励費

清沢 紫織 ベラルーシ及びウクライナにおける民族語の威信形成に関する比較研究（2018-20年度）

プルフォード・エドワード 北東アジアにおける中国人のクロスボーダー：経済と政治へのインパクト（2017-19年度）

植田 暁 全面的集団化期の中央アジアにおける遊牧・農耕経済の研究（2017-19年度）

松寄 英也 自治領なき領域的自治の機能：ソ連解体期のクリミアと沿ドニエストルの比較研究（2017-19年度）

◆ 専任・非常勤研究員セミナー ◆

6月21日：岩下明裕（編著）『ボーダーツーリズム：観光で地域を作る』（北海道大学出版会）
コメンテータ：川久保文紀（中央学院大学）

今回提出されたのは、昨年12月に刊行された編著書で、岩下氏をはじめとするボーダースタディーズの研究者が、地方自治体や旅行会社の協力を得ながら、対馬・釜山、稚内・サハリン、八重山・台湾、小笠原などでおこなったツアーの記録と考察をまとめたものです。コメンテータからは、地域が観光によって構築されると同時に観光を構築する再帰的關係についての問題提起や、観光学者からの反響、応用観光論や観光政治学との関係についての質問が出ました。他の出席者からは、ボーダーツーリズムが成立する条件、地域住民・外国人の声、地域研究にとっての意義、日本帝国の内地と外地・植民地の境界だった場所をたどる旅行とナショナルリズムの関係や、歴史的和解のために持ちうる意味などについての質問・意見が出されました。安全対策など、ツアーのテクニカルな側面も関心を集めました。岩下氏からは、一連のツアーはナショナルヒストリーの相対化という意図を含んでいるという説明のほか、今後の企画のアイデアを含め詳細な応答がありました。[宇山]

7月17日：長縄宣博 “Elusive Piety: The Hajj Logistics and Local Politics in Tatarstan, Daghestan, and the Crimea”

コメンテータ：松里公孝（東京大学）

報告者はこれまで歴史研究をおこなっていましたが、コメンテータの勧めもあって、メッカ巡礼をテーマに現代のこゝを含めてまとめたのが提出されたペーパーで、メッカ巡礼にまつわる新しい現象としての商業化と巡礼者の国別・地域別割当などに焦点が当てられています。報告者の本来のフィールドであるタタールスタンだけでなく、ダゲスタンやクリミアなどでのインタビューが情報源の1つとなっており、それだけでも価値のあるものだとの評価がコメンテータらからなされました。ただ、商業化や割当に関わる負の側面については、当然ながら当事者たちはあまり話しながらなかったということでした。討論では、割当をめぐる地域間・地域内の争いの整理の仕方、政教分離を分析概念として使うことの是非、クリミア問題などにも関係する国際関係の理解、様々な困難があるなかでの巡礼の個人にとっての意義など、多様な問題について議論がなされました。[田畑]

◆ 研究会活動 ◆

- ニュース 153 号以降、センターでおこなわれた諸研究会活動は以下の通りです。[大須賀]
- 5月14日 Lars Westin (ウメオ大、スウェーデン) “Resources, Curses and Urban Development in the North: Analysing the Economics of ‘The Barents Region’” (センター特別セミナー)
- 5月29日 NIHU / UBRJ セミナー「迷走する日露関係? プーチン・安倍会談後の北方領土問題の展望」パネリスト: 岩下明裕 (センター)、黒岩幸子 (岩手県立大)、本田良一 (北海道新聞)
- 6月6日 村上智見 (センター)「中央ユーラシア出土品からみた古代の染織文化」(北海道スラブ研究会)
- 6月11日 ArCS テーマ2・テーマ7 合同企画 サハとグリーンランドにおける開発と環境に関するセミナー
- 6月15日 第26回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会 ジョナサン・ブル (センター)「サハリン・樺太から北海道への引揚げ」
- 6月18日 KNDA-SRC セミナー“The Vision of Korea-Japan Cooperation in Trilateral Relations: Korea-Japan-Russia” Lee, Hyo Young (国立外交院、韓国) “Korea’s New Northern Policy and Trilateral Cooperation Initiatives”; 岩下明裕 (センター) “Japan’s Realities on Northeast Asia”
- 7月4日 SRC-ワルシャワ大学応用言語学研究所ラウンドテーブル“Going West? Impact of English on Changing Languages of the Former Eastern Bloc” 参加者: Laada Bilaniuk (ワシントン大、米国)、Romuald Huszcza (ワルシャワ大、ポーランド)
- 7月7日 「スラブ・ユーラシア地域を中心とした総合的研究」共同研究班報告会 佐藤嘉寿子 (帝京大学短期大)「体制転換後ハンガリーの年金制度の変遷: ネオリベラリズムからポストネオリベラリズムへ」; 醍醐龍馬 (小樽商科大)「雑居地樺太と箱館戦争」; 野坂潤子 (ビルケント大、トルコ)「コーカサス戦争終結後の移民と新聞報道」; ヨフコバ四位エレオノラ (富山大)「ブルガリア語の変化: 冠詞の使用状況を事例に」
- 7月11日 Zainabidin Abdirashidov (ウズベキスタン国立大) “Развитие политических и интеллектуальных тенденций в Туркестане в начале XX века: Взгляд из Стамбула” (センター特別講演)
- 7月18日 藤波伸嘉 (津田塾大)「主権と特権の距離: 近代オスマン帝国をめぐる法、秩序、学知」(北海道中央ユーラシア研究会)
- 7月19日 東和穂 (東京大・院)「ロシア象徴主義とオリエンタリズム」(中村・鈴川基金奨励研究員セミナー)
- 7月20日 小椋彩 (東洋大)「日本におけるロシア・モダニズム受容 (レーミゾフを例に)」(北海道スラブ研究会)
- 7月28日 映画上映会「ユートピアと記憶の亡霊: 東南アジアのドキュメンタリー映画」解説: 坂川直也 (京大)、盛田茂 (立教大)
- 7月29日 ブロニスワフ・ピウスツキ没後百年記念 講演と映画と朗読の集い: ポーランド、サハリン、北海道 井上紘一 (北大名誉教授)「ブロニスワフ・ピウスツキの生涯と仕事」; 佐々木史郎 (国立民族学博物館名誉教授)「ピウスツキが収集したアイヌ衣文化」; 新井藤子 (北大・院)「ピウスツキが日本に残したイメージ: 明治から現在まで」
- 基盤研究 (B)「暴力による民主主義の20世紀: トランスナショナルヒストリーの試み」第1回研究会 草野大希 (埼玉大)「『反帝国』主義者ウィルソンの介入主義: リベラル的介入の『構造的課題』に直面していたウィルソン」; ガンバガナ (国際教養大)「戦後の国際秩序再編における内モンゴル問題」; 佐原徹哉 (明治大)「反システム運動とパン・ソリューション: グローバル・ジハード概念を巡って」
- 7月30日 Tomasz Wicherkiewicz (アダム・ミツキェヴィチ大、ポーランド/センター) “Русские старообрядцы в Польше как периферийное этноконфессиональное (и языковое) микрообщество” (センター特別セミナー)
- 8月1日 伊藤倫 (センター)「日露演劇交流史の一事例: ロシアから日本、日本からロシア」(北海道スラブ研究会)
- 畔柳千明 (東京大・院)「前近代露清関係における北京宣教団史の意義」(中村・鈴川基金奨励研究員セミナー)

人事の動き

◆ 事務職員 ◆

事務担当係長 7月1日付け

熊坂 浩 (獣医学系事務部研究支援担当へ転出)

吉田 哲也 (国立日高青少年自然の家管理係から転入)

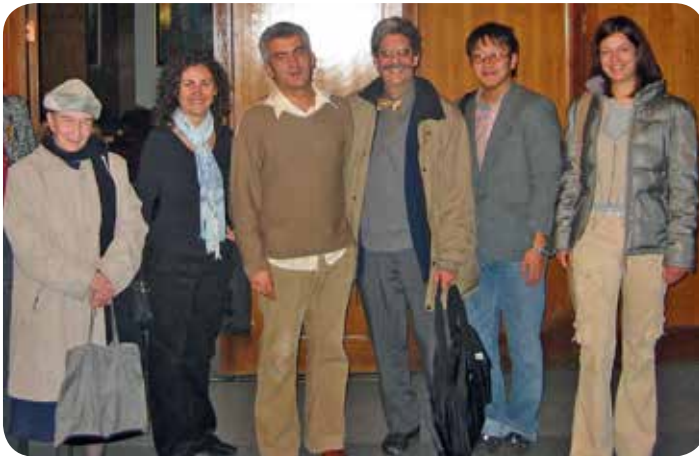
事務補助員 7月31日付け

坂口 夏海 (退職)

[事務係]

マケドニア学士院地域言語研究センター「マケドニア研究シンポジウム」に参加して

野町素己 (センター)

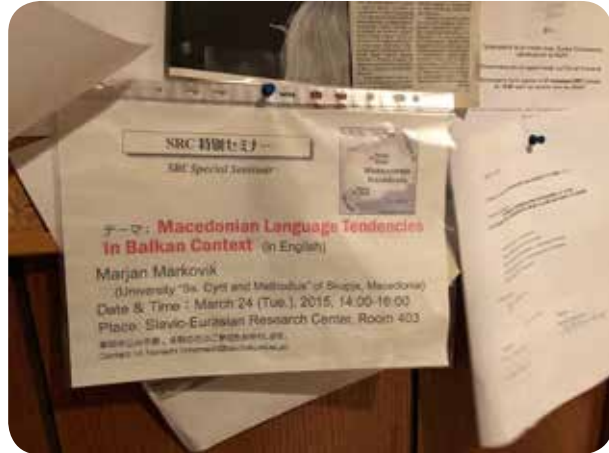


2005年、マケドニア学士院にて。向かって左からトポリンスカ教授、パンチェフスカ博士、マルコビッチ教授、フリードマン教授、野町、ミレンコフスカ研究員

2018年5月17日・18日、マケドニア学士院地域言語研究センター（スコピエ市）が組織する国際研究集会「マケドニア研究シンポジウム」に出席した。この参加に至る（かなり個人的な）背景について説明しておきたい。

まず、2015年3月に地域言語研究センター所長であるマリヤン・マルコビッチ教授をSRCに招聘した際、これまで両者の個人レベルでの研究交流を、今後研究所間のレベルに発展させ、共同プロジェクトを推進させるという提案が彼からなされた。私はもろ手を挙げて賛成した。具体的に何が出来るかは別にして、マルコビッチ教授とは十数年のお付き合いがあり、彼はまず優れた研究者であり、いろいろな研究プロジェクトを成功させてきた。方言調査を一緒にした経験もある。人柄も素晴らしい。そもそも私が地域言語研究センターに出入りするようになったのは2005年からで、カシュブ語に興味を持ったことを当時のベオグラード大学の指導教授に相談したところ、地域言語研究センターの前所長で、かつてカシュブ語を専門とし、現在はマケドニア語研究を中心にしながら、スラブ語学のあらゆる分野で大きな成果を挙げてこられた碩学ズザナ・トポリンスカ教授を指導教授から紹介されたのがきっかけであった。また、SRCはバルカンを研究対象地域に含めてはいるが、マケドニア研究はこれまでなかったし、現地の研究機関との交流もほぼなかった。いずれ、マケドニア

に専門的に取り組みたい学生が入学してくるかもしれないし、そのための受け皿を作っておくのは悪いことではない。また、残念ながらSRCが所蔵するマケドニア関連の資料も豊富ではない。こういったことを踏まえ、彼と私が各々の職場でイニシアティブをとり、両研究所は協定締結の準備を進めた。その後、2016年に在日マケドニア大使がSRCを訪問したことも手伝い、両研究所は2017年に部局間交流協定を結ぶことになった。



私はスラブ語研究者なので、マケドニア学士院地域言語研究センターにて(大須賀氏作成のポスターが誇らしげに飾られている)

多様な言語、その社会的状況や歴史に対しても、これまで深い関心を持っていたし、学部生向けの講義などでも特に楽しい領域である。しかしマケドニア語に特化して研究に取り組んだことはない。比較対象として分析したり、類型論的な観点からマケドニア語の資料を扱ったりするのが主であった。だから、今年1月にマルコピッチ教授とトポリンスカ教授の連名で、標記のシンポジウムへの招待状が届いたときは、少し不思議に思った。彼らも当然私をマケドニア語研究者だとは考えていないからである。初日のセッション・テーマは「ボジダル・ビドエスキ：マケドニア語研究史および国際的なスラブ語研究における彼の位置づけ(没後20年を記念して)」であった。ビドエスキは大変優れた方言学者で、20世紀のマケドニア語方言学の最重要人物であり、国内外での当該分野の発展は彼が主導してきたと言ってよい。上述のマルコピッチ教授は彼の愛弟子である。翌日のテーマは「マケドニア語の動態」である。一日のみの発表でも、両日の発表でも可とのことであったが、いずれのテーマも、マケドニア語を正面から捉えなければいけない上に、それを真にマケドニア語を専門とする研究者の前で話さなければいけない。ビドエスキの主要な著作はほぼすべて手元にあるので(マルコピッチ教授とトポリンスカ教授からは、これまでかなりの量の本や抜き刷りを頂戴した)、それを眺めてテーマを考えようとするが、私が思いつくようなことは専門家だったら誰も知っているだろうと思われる。では、両日のテーマに関わるように、ビドエスキが行った方言研究を踏まえて、ある地点の方言がどのように変化したかを定点観測するのは可能かとも思った。しかし、たった3か月で重要な成果は出るか。それに論じるほどの目ぼしい変化が起きていなかったら、また現地に行ったとしても調査がまともにできずに、そういった変化にも気が付かなかつたら・・・これまでも現地調査から戻ってから「あれを聞いておけばよかった」と何度も思ったのではないか。いずれにしてもリスクが大きかろうと、とにかく否定的な言葉しか頭に浮かばない。テーマはしばらく決まらなかった。

招待のメールが届いた翌日、マルコピッチ教授から改めて連絡があり「君を招待者に加えるために、私は強く主張した。というのは、我々の協定はまだ紙の上にあるだけで機能していないからだ。私は君やSRC関係者と共同研究を実際に進めるために協定を結んだ。まずは僕たちがそれを動かすきっかけを作らないか。だから、ぜひシンポジウムで何か報告してほしい。合わせて、研究所のメンバーやシンポ参加者と共同研究について話し合おう。君のテーマはいつも面白いから心配しすぎないように。」と書かれていた。断るのも一つの選択肢である。しかし真剣に共同研究を考え、素人同然の私に期待してくれることに心打たれ、かつそ

の期待に応えたい気持ちがあるだけに苦悩も増す。

両日のテーマに沿ってマケドニア語を正面から扱いつつも、自分の無知をさらけ出すような内容は避け、それでも参加者が関心を持ちそうで、さらに新しい（つまり聞き手が直接的な答えを知らない）テーマを考えざるを得ない。今回は、幸いなことに手持ちに一つだけそういったテーマがあった。それはサムイル・ベルンシュテインの「マケドニア標準語文法」である。



サムイル・ベルンシュテイン

サムイル・ポリソピッチ・ベルンシュテイン (1911-1997) は、旧ソ連・ロシア最大のスラブ語学者の一人で、特にブルガリア語を中心とした南スラブ諸語研究、スラブ語歴史比較文法などで世界的に知られている。第二次世界大戦が終結に近づき「独立したマケドニア民族のためのマケドニア語の形成」が課題として明確になったところ、ベルンシュテインはモスクワで亡命生活を送っていたマケドニア人政治家ディミタル・ブラホフ (1878-1953) と出会う。ベルンシュテイン自身はマケドニア語研究を1930年代にはじめ、さらにベルンシュテインに最も影響を与えた恩師アフアナシイ・セリシチェフ (1886-1942) がマケドニア方言研究の権威で、彼から手ほどきを受けたこともあり、セリシチェフ亡き後、ソ連では最も有力な南スラブ語研究者の地位を有していた。ベルンシュテインは、将来のマケ

ドニア語標準語形成のために知恵を貸してほしいとブラホフから依頼を受け、それを快諾した。そして1944年、ベルンシュテインはマケドニア文章語形成のためのアドバイザーとして、同じくロシア人のブルガリア文献学研究者ニコライ・セバスチヤノビッチ・デルジャピンとともにマケドニアに招かれることになっていたが、直前になってそれは取り消しになった。それは、「現代マケドニア語の父」と呼ばれる、言語学者で詩人でもあったブラジェ・コネスキ (1921-1993) が、「マケドニア語の問題はマケドニア人が解決すべき」と主張して、彼らの参画に強く反対したからとされる。その後、1945年にマケドニア語はコネスキらが中心となり標準化されることになった。にもかかわらず、ベルンシュテインは「ブラホフと約束した文法書『マケドニア語』」を1947年末に書き上げる。おそらく何度かの出版延長を経て、さらにタイトルを『マケドニア標準語文法概論』に変えて1949年に出版する予定であった。しかし1948年にチトーがスターリンによってコミンフォルムから追放され、両国の関係は悪化しており、その影響のため、この文法書は遂に刊行されることはなかった。ベルンシュテインはその後マケドニア語研究から完全に離れ、本書について言及することもなかったようである。以来、本書について様々な研究者が言及してきたが、原稿の行方は誰も知らず、そもそも原稿が残っているかどうか不明であった。

少し時間がさかのぼるが、私は2000年にモスクワで偶然ベルンシュテインの遺族と知り合いになる機会があり、ベルンシュテインが住んでいたアパートを数回訪問したことがある。沢山の大きな本棚に、ベルンシュテインのあまりに見事な蔵書が整然と並んでいる一方、本棚の一角に中身がない封筒や紙ばさみが散らかっていた。その理由を聞くと「弟子たちが手稿や手紙などを古文書館に持って行って、その時に片付けてくれなかったんですよ」と教えてくれた。当時、私は幻の「マケドニア語文法」のことなど全く知らなかったが、2002年にベルンシュテインの日記が刊行され、そこに確かに1947年12月に文法書を書き上げたとい

う記述を見つけると、どこの古文書館かは知らないが、いずれ古文書館に行く価値はあるのかもしれないと漠然と思った。SRCに着任した2008年以降、古文書館に通うSRCの歴史研究者の影響もあったのだろうか、私もいつかモスクワの古文書館漁りをしてみたいと思い始めた。2014年、ロシア学士院附属スラブ学研究所の研究者に事前に相談して、いくつかの古文書館に絞っていたが、そのうちのある古文書館に最終稿と思われるほぼ完全なタイプ原稿、それとは少し異なる手稿、複数の章の異なるバージョンが保管されていることが分かった。合計で260頁を超えるから、量の点ではまず本格的な著作であると言える。長縄さんから『写経』（古文書を書き写すこと）は本当に大変なんですよ」とよく聞いていたので、スキャンが出来るかどうか確認すると、大変高価ではあるが、これも可能なことが分かった。自身は大した努力もしなかったが、偶然の連続、そして周囲の惜しみない協力のおかげで、すべての文書のスキャンを手に入れることになった。その後、様々な理由でしばらく放置していたが、この原稿の話ならば、知られざるマケドニア語標準語形成期の状況とベルンシュテインの標準語観や記述・分析手法などがわかり、マケドニア語研究史にとって実に興味深いものになるかもしれないと思った。しかも、本格的な学術的価値を持つ、最初のマケドニア語標準語文法は1952年にハーバード大学のホレイス・ラントが刊行したものである。ベルンシュテインが自著を刊行出来ていたら、世界初のマケドニア語の学術的文法書となり、ラントやコネスキ、つまりマケドニア文章語の標準形に何らかの影響を与えた可能性があったかもしれないのである。

今年2月に入ってから、マルコピッチ教授に報告タイトル「マケドニア学士院会員サムイル・ベルンシュテインの知られざる文法書について」と報告のあらすじを伝えると、彼から「これは驚いた。他の参加者もみんな驚くでしょうね。ぜひそれでお願いします」と返事が来たので、準備に取り掛かった。シンポジウムで私の報告は二日目に予定されていたが、マルコピッチ教授が周りに相当言いふらしたようで、一日目からひっきりなしに「あなたは大変な発見をした」と声をかけられ、テレビや新聞のインタビューをいくつも受けることになった。ネットにもあることないこと書かれた。トポリンスカ教授は「あなたから一体どんな面白い話が聞けるのかしら」と、半分皮肉めいたような反応だったが、膨大な知識を持っている彼女なら普通の対応でもあろう。いずれにせよ、マルコピッチ教授に言わせれば、こういった注目もSRCとの協定の成果と考えられるのだそうだ。研究所は、一般社会にも世の中に何か新しい、意味あることを示さなければいけないのである。しかし「どうやって文法書を見つけたのか」と聞かれるたびに「ロシア人研究者を中心に周りの人に助けられて、古文書館で偶然見つけた、あるいは『ほぼ見つけてもらった』とさえ言える」と事実を述べると、その部分はあまり聞いてもらえない。一般的なマケドニア人が望んでいるのは「世界の果てにある先進国、テクノロジーの国の研究者が、マケドニア人研究者やロシア人研究者ですら見つけられなかった70年間行方知れずの幻の文法書を、モスクワの古文書館で発見した」というセンセーションなのである。また、なぜそこまで言語が注目されるのかだが、そこにはマケドニアならではの政治事情が現れてくる。いかにベルンシュテインの如き権威ある研究者が、独立したマケドニア語を認めていて記述していたか、「ブルガリア語の方言」ではないことを知らしめていたか、今日の文脈ではアルバニア人とアルバニア語の脅威からマケドニア語を守るか、という文脈がある種の人々の関心を引くのである。マルコピッチ教授の政治力も働いたのか、最終的には今回の件で大統領官邸にも招待され、「あなたのマケドニア語研究は私たちにとって重要なもので、今回の発見に大変感心しています」と言われた。いずれも、ベルンシュテインの著書の内容とも私の直接的なマケドニア語への関心とも離れているので、微妙な気持ちではあるが、逆に今回の反応を見ることによって、マケドニア人のメンタリティと言語を通じた政治状況への意識の一部を、直接的に知る機会になったと言ってよいだろう。



2018年、マケドニア大統領官邸にて。向かって左から野町、ベン
ジナ教授（ロシア）、ソコウォフスキ教授（ポーランド）、イバノ
フ大統領、クレイマー教授（カナダ）、マルコビッチ教授

私の研究報告には、テレビ局も含めて、比較的予想通り多くの人が集まった。スキャンしたタイプ原稿のうち、最も関心を引きそうな第3章「現代マケドニア語の論争的問題点」を扱い、ベルンシュテインの1945年に成立したマケドニア語標準形に対する批判とその妥当性について、今日的な視点から再考するという内容であった。質疑応答はある種異様であり、十分な時間は取れな

かった。1946年に初めてのマケドニア語文法書（但し学校の教科書）を上梓した故・クルメ・ケペスキ氏の娘と思しき女性が来場し、私の報告内容と全く関係ないことを延々と話していた。その人のポイントは、ベルンシュテインではなく自分の父こそが最初の文法書を書いたということである。これに対して、怒りと困惑に満ちた私の顔を見たマルコビッチ教授は、私に回答させることなく、ロシア人が書いた初めての学術的文法書のはずだったという説明をしていた。その他は歴史関係の質問が多く、私の報告内容と直接関わっていないようなものには、答えられないものもいくつかあったように思う。1960年代からベルンシュテインを直接知っていたトポリンスカ教授は、興味深い点はいくつもあったと前置きをしようとして、ベルンシュテインの知られざる面が明らかになったことの意義を特に評価した。報告原稿はマケドニア学士院地域言語研究センターの出版物から近々刊行されることになっているので、詳細はそちらに譲りたい。また、ベルンシュテインの文法書そのものであるが、こちらは注釈付きの著書として、マケドニア学士院地域言語研究センターとSRCで共同出版する予定である。編集作業はマケドニア語研究の第一人者で、マケドニア学士院会員であるビクター・フリードマン（シカゴ大学）と野町の手によるものとなる。ベルンシュテインの『マケドニア標準語文法概論』は、このような出版アナウンスを重ね、結局日の目を見ることはなかった。本文でも言及したコネスキ、ピドエスキ、ラント、フリードマン、トポリンスカ、マルコビッチ他多数の研究者の活躍のおかげで、この70年間においてマケドニア語研究は著しく発展した。したがって、現在、本書に学術的な価値があるかという問いに必ずしも肯定的な答えはできない。しかし、マケドニア語研究史、スラブ学史にとって重要な資料となることは疑いがない。今回の出版アナウンスこそが、本書刊行の実現につながっていくことを切に願うのである。

学 界 短 信

◆ Association for Borderlands Studies 第2回世界大会開催される ◆

第1回のフィンランド・ロシア大会に続く、ボーダースタディーズの世界大会がウィーンでおこなわれました。会議はウィーンで2日間、ハンガリー国境地域でのフィールドワーク

を挟んでブタペストでさらに2日間続きました。2018年7月10日午後からオープニングセレモニーが執りおこなわれましたが、朝から9つのセッションが並行して始まりました。なかでもウィーンの2日間ではアジアをテーマとしたセッションが全日おこなわれました。これはエドワード・ボイル（九州大）、ジャナジャイ・トリパティ（南アジア大）、ジョナサン・ブル（北海道大）らが組織したもので、中国、韓国、インドな



池氏の報告

どから多数の報告者が参加しています。なかでも日本の研究者のプレゼンスも大きく、本ユニットや九州大学のボーダースタディーズ・モジュール、そしてABS日本チャプターの関係者らが存在感をみせています（初日の報告者は、斎藤慶子、川久保文紀、池直美、古川浩司ら）。*Eurasia Border Review* 誌最新号や9月に九州大学が主催して開く社会科学フォーラム（WSSF）でのボーダー関連セッションにも注目が集まっています。[岩下]

◆ 学会カレンダー ◆

- 2018年10月13-14日 ロシア史研究会2018年度大会 於首都大学東京
http://www.gakkai.ac/russian_history/ 大会 /
- 10月20-21日 ロシア・東欧学会2018年度研究大会 於神戸大学
<http://www.gakkai.ac/roto/>
- 10月25-28日 第19回CESS (Central Eurasian Studies Society) 年次大会 於ピッツバーグ大学
<http://www.centraleurasia.org/annual-conf>
- 10月27-28日 日本ロシア文学会第68回全国大会 於名古屋外国語大学
http://yaar.jp/2018年度_第68回全国大会/
- 11月2-4日 日本国際政治学会2018年度研究大会 於大宮ソニックシティ
<http://jair.or.jp>
- 11月10日 内陸アジア史学会2018年度大会 於日本大学
<http://nairikuajia.sakura.ne.jp/SIAS/>
- 12月6-9日 50th Annual ASEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Convention 於ボストン <http://www.aseees.org/convention>
- 2020年8月4-9日 ICCEES第10回大会 於モントリオール <http://iccees.org/>

[編集部]

図書室だより

◆ 『プラウダ』はどこへ? ◆

大学院の新入生を迎えたこの4月、戦後の『プラウダ』はどこにありますかという質問をいただきました。

それは目録を見てください、と、附属図書館OPACを見ると、わたし自身あれどこだ?見つけられません。

とりあえず学生には、附属図書館5階の新聞バックナンバー庫にあることを案内しつつ、

さらに調べると、目録上、書庫5階にある原紙の所蔵範囲が改変され、そこにモノがあるにもかかわらず落とされた様子。『イズヴェスチヤ』も同様のことになっています。

早速附属図書館に連絡して、調査を要請しました。

現場には、もともと附属図書館が購読した原紙を製本した資料と、センターが購入・製本した資料が年代順に一体となって排架されているのですが、前者は資産登録なし、後者は資産登録済みです。どうやら、担当者が、現物の状況を確認しないまま所蔵データを大幅に書き換えてしまったと見られます。

その後、残念ながら、図書館担当者側からこのことの詳細についての連絡はありません。連絡を受けて資産登録がない部分を含めるように所蔵データを再修正したようですが、それがどこまで所蔵を正確に反映しているかには問題があります。図書館側には、今後同様のことがないように、未登録の製本新聞を資産登録することを提案しましたが、現時点では、まだ実施されていないようです。

『プラウダ』『イズヴェスチヤ』は、それぞれソ連共産党とソ連政府の機関紙であり、ソ連の政治、社会を研究する上で基本資料であることはここで言うまでもないことですが、両紙のバックナンバーをまとめて利用できる場所は、必ずしも多くありません。これは、ロシア・ソ連研究における北大の大きなアドヴァンテージです。長年国費を投じて整備できた、北大の貴重な研究資源として、よく整備された資料的環境をしっかりと後世に継承できるよう努めていきたいものです。[兎内]

編集室だより

◆ Slavic Eurasian Studies No. 34/Slavica Tartuensia XI ◆ *Slavjanskaja mikrofilologija/Slavic Microphilology* Aleksandr D. Duličenko and Motoki Nomachi, eds. の刊行



本論集は、スラブ世界の小規模な言語とその言語による文学に関する研究を集めたもので、2018年8月にベオグラード（セルビア）でおこなわれた、第16回国際スラビスト会議に向けて編まれた研究書です。本書は40年近く当該分野の第一人者でありつづけているアレクサンドル・ドゥリチェンコ教授（タルトゥ大学）と2000年代からその背中を追ってきた野町による共編で、上・下ソルブ語、ボイボディナ・ルシン語、カルパート・ルシン語、カシュブ語、モリーゼ・クロアチア語、西ポレシエ語、ゴーラ語といった小言語を、社会言語学、文法論、歴史、文学といった様々な切り口から分析した計20本の論文が掲載されています。なお、この論集は本学と全学レベルで協定を結んでいるタルトゥ大学との共同出版でもあります。上記、国際スラビスト会議では、組織者からの提案で書評会がおこなわれ、本書の扱う内容への関心の高さが見て取れました。内容は以下の通りです。[野町]

I. Общетеоретические вопросы славянской микрофилологии

Дуличенко Александр Дмитриевич. Славянская микрофилология

Dunn John. Славянские языки и процессы языковой фрагментации в современной Европе

Steinke Klaus. Mikroliteratursprachen und Globalisierung

Tamaš Julijan. Književnost, filozofija, kultura, istorija i aspekti bezbednosti nacionalnih manjina
Csenar-Schuster Agnjica. Kakove izgledе ima gradišćanskohrvatski jezik za svoј opstanak?

II. Из мира современных славянских микроязыков

Magocsi Paul Robert. The Rusyn Language: Recent Achievements and Challenges

Ломакина Ольга Валентиновна, Мокиенко Валерий Михайлович. Карпаторусинские соматические паремии на славянском фоне

Падяк Валерий. Повышение статуса карпаторусинского языка до уровня литературного (письменного) стандарта в Украине (2004–2014)

Moser Michael. Ориєнтація на «масового читача» та наслідки для вивчення історії слов'янських мов – «О письменном языць подкарпатских русинов» Августина Волошина (Ужгород, 1921) в осучасненому виданні

Капраль Михаил. Словообразование в карпаторусинских диалектах: образование наименований лиц в говоре села Великие Лазы Ужгородского района

Климчук Федор Данилович. «Новый Завет» в переводе на западнoпoлeсский говор

Суляк Сергей Георгиевич. Русины Молдавии: яркое прошлое и туманное будущее

Рамач Юлиан. Дісприкметніки презента у руским литературним языку (двадцети-трицети роки XX вику)

Фејса Михајло. Русински и српски еквиваленти енглеских модала

Рамач Янко. Подоби Христа, апостолах и святых у апокрифох Руснацох у Южней Угорскей

Lewaszkiwicz Tadeusz. Dolnołużyccy i górnołużyccy pisarze, publicyści, tłumacze i redaktorzy jako językoznawcy i kodyfikatory łużyckich języków literackich

Marti Roland. Codification and Re(tro)codification of a Minority Language: The Case of Lower Sorbian

Cybulski Marek. Rola *Biblioteki Pisarzy Kaszubskich* w procesie podnoszenia statusu językowego kaszubszczyzny

Breu Walter. Судьба местного падежа в трех говорах молиско-славянского микроязыка (под влиянием итальянского языка)

Nomachi Motoki. The Gorani People in Search of Identity: The Current Sociolinguistic Situation Among the Gorani Community of the Former Yugoslavia

III. О ситуации со славянскими микроязыками

Дуличенко Александр Дмитриевич. О ситуации со славянскими микроязыками: Международная комиссия по славянским микроязыкам при Международном Комитете славистов

Linnamägi Madis. Содержание 10 томов Научной серии «Slavica Tartuensia» (1985–2013)

◆ ACTA SLAVICA IAPONICA ◆

7月13日に40号の投稿が締め切られました。世界11カ国の研究者から論文12本、書評5本が投稿されました。現在査読がおこなわれています。[野町]



(2018年6～8月)

◆ センター協議委員会 ◆

2018年度第1回 6月26日(火)

議題

1. 任期付き教員の任期更新について
2. 2017年度支出予算決算(案)について
3. 2018年度支出予算配当(案)について
4. 研究生の受入(新規・継続)について
5. 特別研究学生の受入(新規)について

2017 年度第 2 回 8 月 7 日 (火)

- 議題
1. 教員の人事について
 2. 客員研究員の人事について

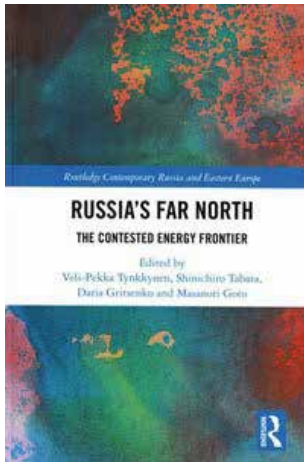
◆ センター運営委員会 ◆

2018 年度第 1 回 7 月 7 日 (土)

- 議題
1. 共同利用・共同研究拠点の活動について
 2. 共同利用・共同研究公募のあり方について [事務係]

みせらねあ

◆ *Russia's Far North* の刊行 ◆



2018 年 3 月に、Routledge 社から単行本 *Russia's Far North: The Contested Energy Frontier* (edited by Veli-Pekka Tynkkynen, Shinichiro Tabata, Daria Gritsenko, Masanori Goto, 252 pages) が刊行されました。2 年前の 2016 年 7 月に、スラブ・ユーラシア研究センター夏期国際シンポジウムで報告されたペーパーの中から、選抜・推敲された論文 15 本が、本書に収められています。

本書のもととなった夏期国際シンポジウムは、さらにそこから 2 年さかのぼること 2014 年 9 月に開始された、フィンランドとの二国間交流事業共同研究「ロシア最後のエネルギー・フロンティア：極北地域の持続的発展への挑戦」の統括イベントに当たるものでした。したがって、本書は、当共同研究の成果物出版に相当します。

共同研究の期間中から、日本とフィンランドの研究者が中心となって、ロシアのエネルギー開発の拠点として注目される極北地域の政治・経済・文化の動向を調査してきました。世界的な油価低迷で北極海の石油開発が停滞する一方、北極海の海面面積が記録的に減少するなか、2017 年末にはヤマル半島から LNG 出荷が開始されるなど、ロシア極北のエネルギー開発をめぐる状況は刻々と変化しています。本書は、激動するロシア極北の今を切り取るとともに、エネルギー開発、環境問題、先住民の暮らし、文化的表象といった複数の視点から光を当てたものとなっています。

目次詳細については、スラブ・ユーラシア研究センターのサイトからご覧になれます。[後藤]
http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/books_new/2018/Tabata-Goto/index.html

◆ 人物往来 ◆

ニュース 153 号以降のセンター訪問者（客員、道央圏を除く）は以下の通りです（敬称略）。
[仙石／大須賀]

- 5 月 11 日 榎本浩之（国立極地研究所）
- 5 月 14 日 Lars Westin（ウメオ大、スウェーデン）
- 5 月 25 日 大石侑香（日本学術振興会特別研究員）
- 6 月 11 日 大石侑香（日本学術振興会特別研究員）、末吉哲雄（国立極地研究所）、高倉浩樹（東北大）、
檜山哲哉（名古屋大）、朴昊澤（海洋研究開発機構）、本多俊和（元放送大）

- 6月18日 Cho, Byung-jae (国立外交院、韓国)、Kim, Dok-ju (同)、Lee, Hyo Young (同)
7月1日 東和穂 (東京大・院)
7月4日 Romuald Huszcza (ワルシャワ大、ポーランド)
7月5-6日 Vladimir Davydov (ピョートル大帝記念人類学・民族学博物館、ロシア)、Alyne Delaney (オールボー大、デンマーク)、Sean Desjardins (フローニンゲン大、オランダ)、Gail Fondahl (ノーザンプリティッシュコロンビア大、カナダ)、Kenneth Frank (グイッチン文化伝承者)、Caroline Frank, Sergey Glebov (アマースト大、米国)、Joachim Otto Habeck (ハンブルグ大、ドイツ)、Stephen Leisz (コロラド州立大、米国)、Amy Lauren Lovecraft (アラスカ大、米国)、Mark Nuttall (アルバータ大、カナダ)、Olga Povoroznyuk (ウィーン大、オーストリア)、Andreas Renner (ルートヴィヒ・マクシミリアン大、ドイツ)、Vyacheslav Shadrin (人文科学・少数民族研究所、ロシア)、Thomas Thornton (オックスフォード大、英国)、岩崎一郎 (一橋大)、井上敏昭 (城西国際大)、大石侑香 (日本学術振興会特別研究員)、大島美穂 (津田塾大)、大村敬一 (放送大学)、神長英輔 (新潟国際情報大)、岸上伸啓 (国立民族学博物館)、窪田順平 (人間文化研究機構)、レニ・シャルボノ (マールボロ大、米国)、シン・クオチャン (成功大、台湾)、末吉哲雄 (国立極地研究所)、高倉浩樹 (東北大)
7月7日 五十嵐徳子 (天理大)、黒木英充 (東京外国語大)、河野泰之 (京都大)、佐藤嘉寿子 (帝京大学短期大)、中田瑞穂 (明治学院大)、中村唯史 (京都大)、野坂潤子 (ビルケント大、トルコ)、ヨフコバ四位エレオノラ (富山大)
7月11日 Zainabidin Abdirashidov (ウズベキスタン国立大)
7月13日 畔柳千明 (東京大・院)
7月18日 藤波伸嘉 (津田塾大)
7月20日 小椋彩 (東洋大)
7月28日 坂川直也 (京都大)、盛田茂 (立教大)
7月29日 ガンバガナ (国際教養大)、草野大希 (埼玉大)、佐原徹哉 (明治大)

◆ 研究員消息 ◆

ウルフ・ディビッド研究員は2018年5月15～29日の間、テーマ「中露関係の新展開：『友好』レジーム形成の総合的研究」関連資料収集のため、米国に出張。

田畑伸一郎研究員は6月14～25日の間、Arctic Science Summit Week 2018 & IASC Business Meetings 出席及び意見交換、また SCAR/IASC Open Science Conference 出席及び意見交換のため、スイスに出張。

岩下明裕研究員は7月17～19日の間、上海外国語大学において「日本の北東アジア政策を理解する」講演のため、中国に出張。

野町素己研究員は5月12～20日の間、研究打合せ及び資料収集(ブルガリア)、またシンポジウム「国際学会マケドニア研究週間」出席、研究報告及び現地調査(マケドニア)のため、ブルガリア、マケドニアに出張。5月23～31日の間、「21回バルカン・南スラヴ言語学・文学・フォークロア学会」出席、研究発表及び聞き取り調査(カナダ)、また研究打ち合わせ(アメリカ)のため米国、カナダに出張。6月9～16日の間、研究打合せ、授賞式参加及び公開討論参加のため、ポーランドに出張。

長縄宣博研究員は6月17日～7月1日の間、「文書館とオレンブルグ地方：現代の挑戦と解決方法」出席、オレンブルグ社会政治史文書館主催「バシュコルトスタン共和国ピシャブリヤク地デュシャノヴァ村見学」参加及び資料調査のため、ロシアに出張。

宇山智彦研究員は7月20～26日の間、“Mobilizing academic communities in Central Asia to produce new knowledge about the 1916 Uprising and to build shared academic platforms for exchanging and disseminating knowledge about ethnically or/and politically sensitive topics” プロジェクト第2回ワークショップ出席のため、クルグズスタンに出張。[事務係]

目 次

研究の最前線.....	1
2018 年度夏期国際シンポジウム《移りゆく北極域と先住民社会：土地・水・氷》 開催される／ボーダースタディーズ・サマースクール開催される／公開講座「ロシアと北極のフロンティア：開発の可能性と課題」開かれる／センター一般公開開催される／2018 年度中村・鈴川奨励研究員決まる／2018 年度科学研究費プロジェクト／専任・非常勤研究員セミナー／研究会活動	
人事の動き.....	8
事務職員	
マケドニア学士院地域言語研究センター「マケドニア研究シンポジウム」 に参加して by 野町素己.....	8
学界短信.....	12
Association for Borderlands Studies 第2回世界大会開催される／学会カレンダー	
図書室だより.....	13
『プラウダ』はどこへ？	
編集室だより.....	14
Slavic Eurasian Studies No. 34/Slavica Tartuensia XI <i>Slavjanskaja microfilologija/Slavic Microphilology</i> Aleksandr D. Duličenko and Motoki Nomachi, eds. の刊行 ／ACTA SLAVICA IAPONICA	
会議（2018 年 6～8 月）.....	15
センター協議委員会／センター運営委員会	
みせらねあ.....	16
Russia's Far North の刊行／人物往来／研究員消息	

2018 年 9 月 4 日発行

編集	大須賀みか
編集協力	宇山智彦
発行者	仙石 学
発行所	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 060-0809 札幌市北区北 9 条西 7 丁目 Tel.011-706-3156、706-2388 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/
